

スケート発祥の地に 日本選手が凱旋!?

以前に触れたが、私はスピードスケート選手である。レベルはプロとアマの境界あたり。「中途半端」と言われても全く気にしない。滑走と人生を楽しんできた。

さて、スケート発祥の地はオランダである。1986年には世界初の室内リンクが完成し(図1)、世界記録が続出。ここで、今回「国際マスタースターズ選手権」が開催された。

国際マスタースターズ大会

我が国の国体は英語で National Sports Festival と呼ばれ、世界で最大規模であるのをご存じだろうか。こんな大会の継続は、世界に誇ることができなのだ。



図1



図2

その冬季国体のスケート選手が中心となり、マスタースターズ大会が開催されてきた。2010年2月、群馬県の伊香保リンクに参集して皆で競い、温泉でゆったり心身を癒すことに。その際、国際大会への出場も提案され、筆者を含め日本の戦士6名が、世界大会に滑り込んだ(図2)。

6人の侍

日本から空路で12時間、アムステルダムから列車で2時間、HeerenveenのThialfに到着。素晴らしい、さすが、スケート王国だ!

大会は3月22〜24日。短距離から長距離まで。出場者

144名のうち日本選手は6名で、実力派は高橋、相沢、近藤氏。医師の河田と板東、4ヶ国語を操るマルチタレント会社員で先般実



ばんどう ひろし 氏
板東 浩

糖尿病専門医、ピアニスト、スピードスケーター、マスタース陸上選手、著書として「肥満脱出大作戦」「Dr.板東の音楽療法シリーズ」など。印刷物は1100点以上。

業団スケートクラブを設立した坂本らは、交流を深める役割も演じたのである。

我々は気持ちよく良いタイムで滑走できた。氷の状態も良好であり、電光掲示板には各選手のパーソナルベストが刻々と表示。英語の実況中継も的確で、運営はパーフェクトであった。

また、各国の選手とも親交を深めたり、スケート技術を教えてもらったり。このような国際親善や理解、協力がさらに広がってほしい。

歴史と人を感じる

レース後には、皆で本場のスケートショップへ。そこで初期のスケート靴に遭遇した。先人による発明から現代まで、綿々たる工夫や研究の流れを感じた。

この遠征は「6人の侍が刀の刃を研ぐようにスケートの刃を磨き、心身の鍛錬で心も研ぎ澄まし、国際舞台に斬り込んだ」と言えるかも。歴史的貢献はできなくても氷面下に足跡を残し、後輩たちへの道標を残せたら嬉しく思う。